

法華寺境内および 法華寺庭園の調査

—第 644・645・651 次

1 概要

光明宗法華寺では、2018 年にとりまとめた『名勝法華寺庭園保存活用計画』に基づき名勝法華寺庭園の保存整備事業を進めている。奈文研では光明宗法華寺からの委託を受け、2019 年度から保存整備事業にともなう発掘調査を継続的に実施している。ここでは、2021・2022 年度に名勝法華寺庭園の保存整備事業および法華寺境内の消火設備改修工事にともない実施した平城第 644・645・651 次調査について報告する（図 86）。

2 遺跡の位置と環境

法華寺は、天平 17 年（745）の平城京遷都に際し、光明皇后が平城宮東院に東接する父藤原不比等旧宅を施入して創建した寺である。はじめは宮寺と呼ばれたが、ついで大和国の国分尼寺に当てられ総国分尼寺とも称された。平安時代に衰退したが、鎌倉時代に叡尊が復興し金堂等を再建、その後、戦国時代に焼失。再び豊臣秀頼が復興するという長い歴史をもつ。もともとの伽藍中心部は現境内の南側、住宅密集地に広がっており、現在の南門がちょうど講堂の位置を踏襲するという位置関係にある。現在の法華寺境内は、旧境内の北半にあたる。

法華寺境内における既往の発掘調査には、茶室・茶庭築造にともなう事前調査によって礎石および掘立柱を使用した東西棟建物がみつかった第 79-2・10 次調査（『昭和 47 年平城概報』）、境内西南で収蔵庫建設に先立って調査されやはり礎石建物がみつかった第 98-17 次調査（『昭和 51 年平城概報』）、浴室北側の茶室建設に先立つ事前調査で奈良時代の掘立柱建物が重複してみつかった第 151-16 次調査（『昭和 58 年平城概報』）などがある。また、本堂、鐘樓の修理の際にも広く調査されているが、当地域の全体像や移り変わりについての所見はなお不鮮明である。

1952 年には本堂の解体修理にともなう発掘調査がおこなわれ、本堂の下で桁行 7 間（柱間 10 尺等間）、梁行 4 間（柱間 9 尺等間）の東西棟の二面廂建物を検出し、1954 年にはその南側（本堂前面）でも同規模の東西棟建物を確認した¹⁾。本堂下の建物は当初掘立柱と礎石を併用していた

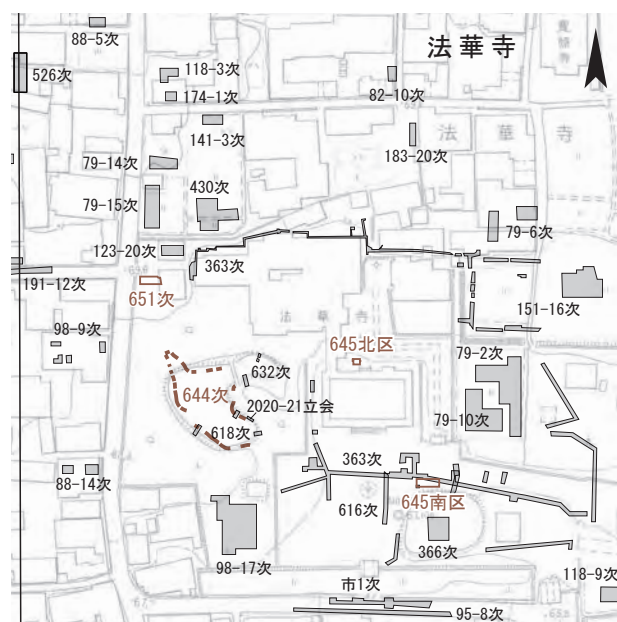


図 86 第 644・645・651 次調査区位置図 1 : 2000

が、後に掘立柱を礎石へ変えたこと、本堂前面の建物は当初掘立柱建物であったが、後に礎石建へと建て替えられたことも判明した。

2003 年度の防災施設改修工事に先立つ第 363 次調査では、本堂前面の東西棟建物 SB8600 の東で、それと同規模と推定される東西棟建物 SB8601 を新たに検出した（『紀要 2004』）。

2019 年度の防犯施設改修・増設にともなう第 616 次調査では、SB8601 の柱想定位置で重複する 2 基の柱穴を検出し、掘立柱建物の段階で 2 時期以上の建て替えがおこなわれた可能性を指摘した（『紀要 2020』）。

名勝法華寺庭園は法華寺客殿にともなう庭園である。法華寺本堂西辺の築地塀に囲まれた一画にあたる「主庭」は、客殿のうえの御方からの眺望を意図し、中央に池を配して南の正面に位置する出島上の築山には枯滝石組みと枯流れを設ける。その背後には常緑樹の混植による高生垣がまわる。上の御方から南西方向には、土橋越しに岩島や対岸にある築山の石組を望むことができる。

2019 年度から保存整備事業の一環として発掘調査を実施しており、2019 年度の第 618 次調査では池護岸の崩壊原因および構築技法の解明を目的に、池南半部の岸について調査した（『紀要 2020』）。

2020 年度の第 632 次調査では、池の北半部を対象に、築山景石の状況の確認および池護岸の状況を解明することを目的として調査をおこない、築山北面の景石の一部は原位置を保っていないことなどが判明した。また、これと並行して実施した庭園護岸改修工事にともなう立会

(第2020-24次)では、古代の柱穴とみられる遺構を検出している(『紀要2021』)。

3 第644次調査

(1) 作業の経過

名勝法華寺庭園の石組護岸修理にともなう発掘調査である。計21カ所の修理箇所について、石組護岸修理に必要な掘削範囲・掘削深度の中で、古代の遺構の有無を確認した。各修理箇所の呼称と位置は図87に示した。

調査期間は2022年1月24日から2月14日までである。1月24日に現地協議。2月1日に旧トレンチ(第618次3トレンチ)再掘、19区表土掘削。2日に17・18・カ・19区を完掘、17区で凝灰岩を検出。3日に17区の凝灰岩を精査し写真撮影。4日に13・14・21区を完掘。7日に7・8・9・9b・10・11区を完掘。8日に2・3・ア・4・5・6区を完掘。9日に4区の写真撮影。14日に1・15区を完掘。記録を作成して調査を終了した。

本調査では、発掘調査と並行して、出土遺物の洗浄・分類等の作業を実施し、調査終了後も継続して整理作業をおこなった。

(2) 調査の方法

発掘調査は石積護岸の修復工事と同時並行でおこなった。調査では基準点平城No.54(X=-145,389.024、Y=-18,064.600、H=61.364m)から、トータルステーションで調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は、オートレベルで直接水準移動をおこなった。掘削および遺構検出作業は、すべて人力でおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

(3) 基本層序

現地表から表土(厚さ5cm程度)、石組護岸裏込土(約60cm)、地山(緑灰色細砂層、現地表下約60cm、標高67.0m付近)である。掘削範囲・深度は、基本的に石組護岸裏込土内(下層は粗砂・上層は砂質土もしくは粘質土)におさまるが、部分的に地山とみられる緑灰色細砂層(8・11・17)および庭園盛土の可能性がある黄褐砂質土(11区)を検出した。

(4) 検出遺構

いずれの調査区においても、古代の遺構は確認できなかった(図88、PL.26～29)。11・17区では最下面で地山とみられる緑灰色細砂層を検出したが、確実な古代の遺構は未検出である。17区(中島西北角)の緑灰色細砂層上

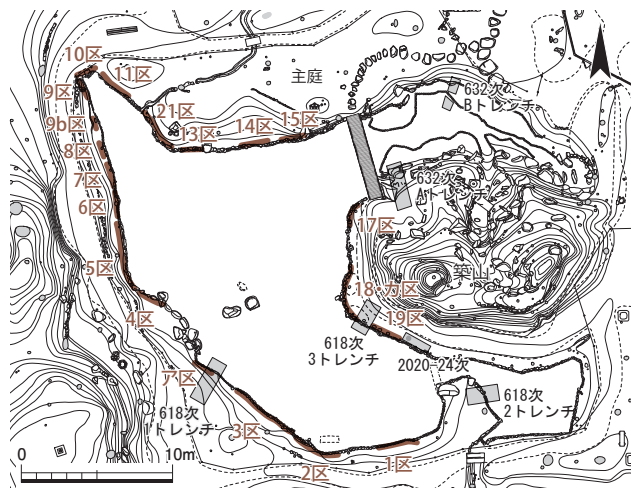


図87 第644次調査の調査区位置と呼称 1:500

面では、東西・南北それぞれ約75cm、厚さ約35cmの凝灰岩切石を検出した(PL.28-6)。上面は平坦面をなし、上半部を台形状に、下半部を逆台形状に斜めにカットする。二上山産か。切石の下面に瓦が入り込むため原位置を保っていないとみられるものの、全体は未検出であり用途や時期などの詳細は不明である。礎石や仏像台座、石塔の部材などの可能性がある。(大澤正吾/文化庁・桑田訓也)

(5) 出土遺物

石組護岸裏込土を中心に瓦類、土器類が出土した。

瓦磚類 本調査で出土した瓦磚類は表15のとおりで、軒丸瓦9点、軒平瓦17点、丸瓦60.5kg、平瓦330kg、磚1点、このほか道具瓦、刻印瓦などが出土した。軒丸瓦は細片が多く、以下では軒平瓦で残りのよい資料についてのみ記述する(図89、PL.29-3)。

図89-1は6681Fで、凹面ヨコケズリ、曲線顎で凸面はタテ縄タタキ後に顎部をヨコナデする。21区出土。2は6714Aで、凹面の瓦当縁から後方へ7cmほどの幅でヨコケズリするも布目が残る。曲線顎で顎部はタテケズリ、凸面はタテ縄タタキを施す。5区出土。3は6716Cで、凹面ヨコケズリ、段顎で顎長は7cm、凸面はナデ調整。ア区出土。6716Cは大安寺で多く出土しており、法華寺旧境内ではごく少ない。以上は奈良時代の軒平瓦である。4は平安時代の軒平瓦で、凹面ヨコケズリ、曲線顎で顎部から凸面にかけてタテケズリ。5区出土。5は唐草文で圈線が巡る。凹面には布目がみられる。ア区出土。6は均整唐草文と珠文で、法華寺22と同範であろう²⁾。1区出土。7は唐草文で周囲に圈線が巡る。法華寺23と同範であろう。2区出土。以上は鎌倉時代の軒平瓦である。8は室町時代の軒平瓦で、半裁菊花文と水波文。18区出土。9は中心飾りが蓮華文系である。2区出土。10は半

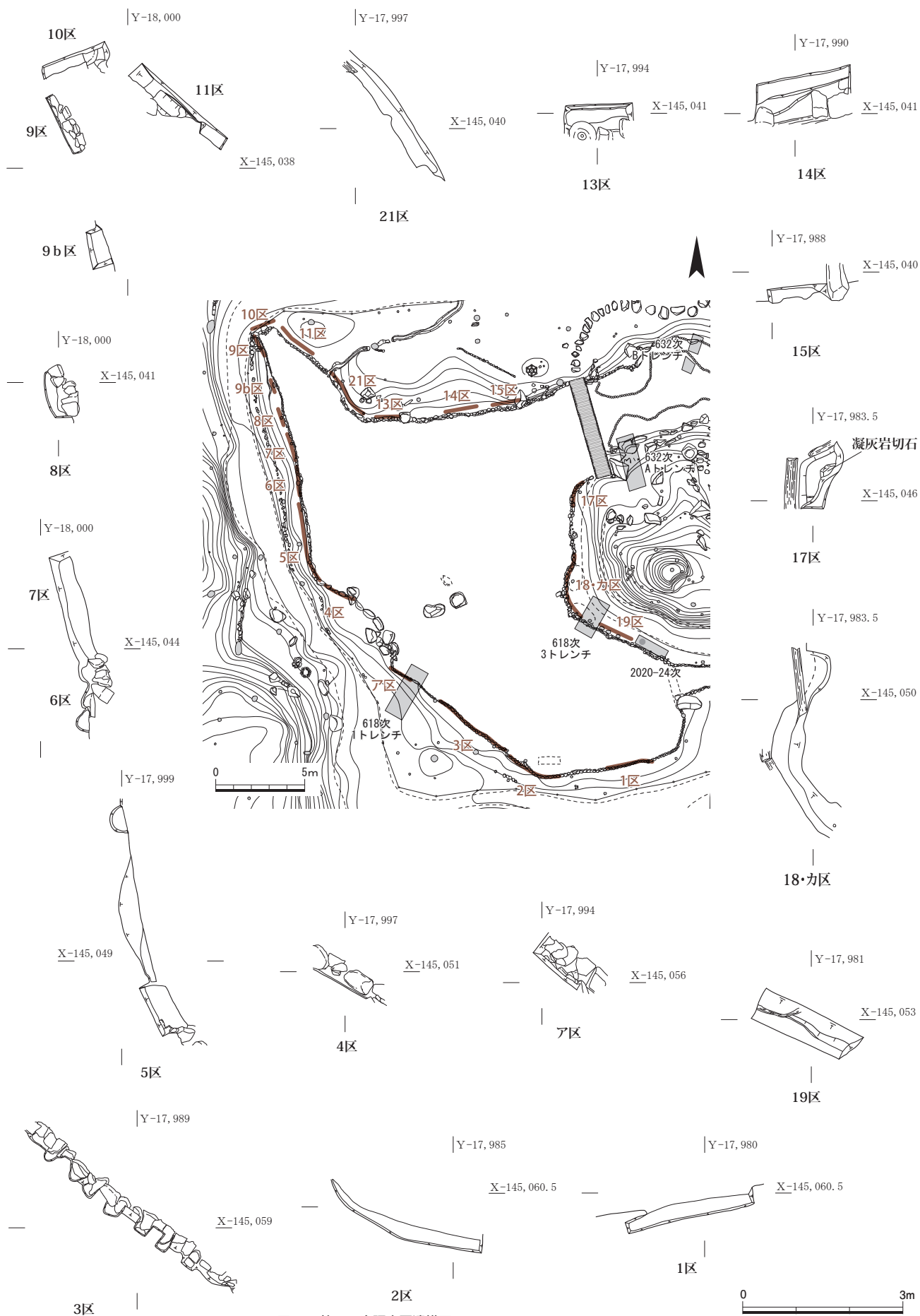


図 88 第 644 次調査区遺構図 1 : 100 (調査区位置図は 1 : 300)

裁菊花唐草文の軒棧瓦である。2区出土。11と12は中心飾りが不明、別範である。いずれも14区出土。以上は江戸時代の瓦である。表中の伏間瓦の刻印は「瓦佐」である。

(今井晃樹)

土器・陶磁器類 各トレンチより、古代から近現代までの土師器・須恵器・瓦質土器・施釉陶器・染付など、整理用コンテナ1箱分の土器・陶磁器類が出土した。深鉢形・浅鉢形・播鉢形の瓦質土器を比較的多く含む。(丹羽崇史)

鉄 滓 5区から鉄滓が4点出土した。うち1点は碗形鉄滓。残存長6.1cm、厚さ1.8cm。

石 材 板状ないし塊状の花崗岩、安山岩、片麻岩片が計9点出土した。17区の石橋下から出土した板状の花崗岩片がもっとも大きく、長さ38cm、厚さ6cm程度。

(和田一之輔)

表 15 第 644 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			軒棧瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6285	A	1	6681	F	1	近世	1
菊花文(近世)		1	6714	A	1		
巴(中世)		2	6716	C	1	軒棧瓦計	1
(近世)		2	平安		2	その他	
中世		1	鎌倉		2	丸瓦(刻印)	1
近世		1	室町		1	平瓦(刻印)	4
型式不明		1	近世		6	棧瓦(完形)	1
			時代不明		3	箱罫斗瓦	1
						伏間瓦	2
						(刻印)	1
						鬼瓦	1
						飾り瓦	1
						特殊磚	1
軒丸瓦計		9	軒平瓦計		17	その他計	13
丸瓦			平瓦			磚	凝灰岩
重量	60.541kg		330.385kg		0.497kg	0.145kg	
点数	445		2,716		1	2	

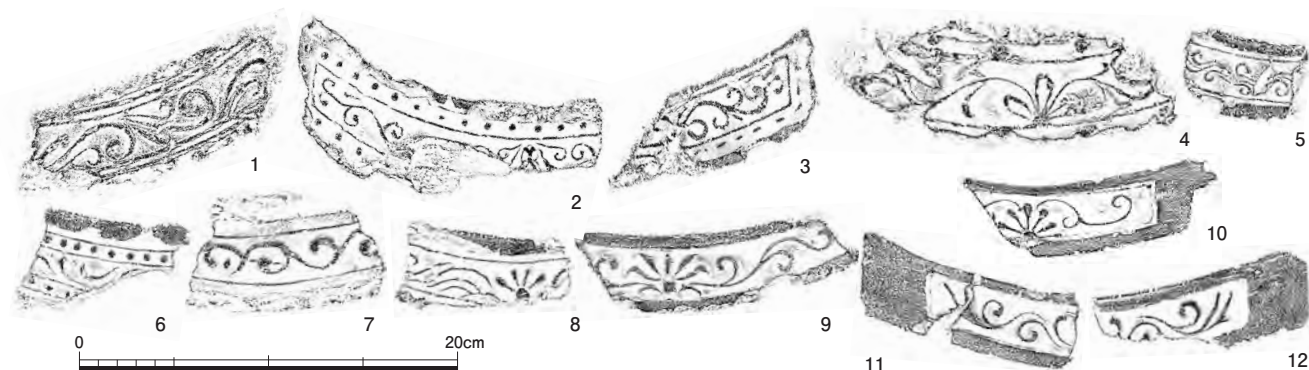


図 89 第 644 次調査出土軒平瓦 1 : 4

4 第 645 次調査

(1) 作業の経過

史跡法華寺旧境内における消火設備改修工事にとともなう発掘調査である。工事箇所のうち、一斉解放弁バルブピットを設置する本堂の裏手(北区)と本堂の前庭部分(南区)の2ヵ所については発掘調査を実施し(図 86)、その他の部分については工事立会に対応した。2ヵ所の発掘調査区は、北区が本堂の下で検出した東西棟建物のすぐ北側、南区がSB8600とSB8601の間にあたり、奈良時代の顕著な遺構は想定されていない場所である。想定の有無、および奈良時代以降の顕著な遺構の確認を主たる目的として調査を実施した。

調査期間は2022年1月17日から2月9日までである。1月12日・13日に工事業者による縄張り、14日に調査区の座標測量とレベル移動。17日に南区の掘削を開始し、調査区を東に拡張した。24日に北区の掘削を開始、南区の全景写真を撮影。27日に北区の全景写真を撮影、28日に北区を引き渡し。31日に南区をさらに東へ拡張。2月3日に南区の全景写真を撮影。9日に南区に遺構面保護のための砂を撒いた状態で引き渡し調査を終了した。

本調査では、発掘調査と並行して、出土遺物の洗浄・分類等の作業を実施し、調査終了後も継続して整理作業をおこなった。

(2) 調査の方法

調査区は、北区は東西1.7m、南北1.4mの2.38㎡、南区は一部を第363次調査区と重複させて東西6m、南北2mの12㎡として設定した。

北区は、すべて人力で掘削・遺構検出をおこなった。

南区は、表土・遺物包含層の掘削は重機で、遺構検出・掘削作業は人力でおこなった。調査では、GNSS 測量機を用いたネットワーク型 RTK 法で調査区内に基準線を設定し、縮尺 1/20 を基本に平面図を作成した。標高は平城No 54 (X = -145,389.024, Y = -18,064.600, H = 61.364 m) からオートレベルで直接水準移動をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

(3) 基本層序

北 区 現地表から①表土 (厚さ 10 ~ 15 cm)、②近世以降の遺物包含層 (約 25 cm)、③黄褐色シルト (整地土、5 ~ 10 cm)、④黄褐色粘質土 (地山) である (図 90)。③層および④層上面で遺構検出をおこなった。検出面の標高は約 67.2 m (現地表下約 40cm) である。

南 区 現地表から①表土・造成土 (10 ~ 25 cm)、②にぶい黄褐色砂質土 (遺物包含層、調査区東部のみ、約 10cm)、③黄褐色粘土 (地山)、④にぶい黄橙色粗砂 (地山) である (図 91)。③層上面で遺構検出をおこなった。検出面の標高は 66.6 ~ 66.3 m (現地表下 15 ~ 40 cm) である。

(4) 検出遺構

北 区 調査区東部の③層上面で時期不明の落ち込み SX11712 を検出したほかには、近世以降の攪乱のみの確認にとどまり、顕著な遺構は認められなかった (図 90、PL.30-1)。

南 区 ③層上面で柱穴 1 基・土坑 5 基 (古代 1 基、中近世 3 基、時期不明 1 基) を検出した (図 91、PL.30-2)。

東西棟建物 SB8601 調査区東北隅の第 363 次調査区との重複部分で、身舎西北隅柱の柱穴を再検出した。調査区東南隅付近は、身舎西妻柱の想定位置にあたるが、後述の土坑 SK11706 を検出したのみで、礎石の据付・抜取痕跡や掘立柱の柱穴などは検出できなかった。

土坑 SK11706 調査区東南隅で検出した。東西 0.5 m 以上、南北 0.3 m 以上、深さ約 30cm。埋土はしまりの悪い灰黄褐色粗砂で、植物種実・木片を含む。埋土の様相から、第 363 次調査で検出した池 SG8605 の延長部とみられる。池 SG8605 は、『大和名所図会』(寛政 3 年〈1791〉刊)に描かれている鐘楼を取り巻く池に比定されている (『紀要 2004』)。

土坑 SK11707 調査区中央部で検出した。東西 1.6 m 以上、南北 1.8 m 以上、深さ約 55cm。埋土に土器・瓦を多く含む。完形の灯明皿がまとめて出土した。

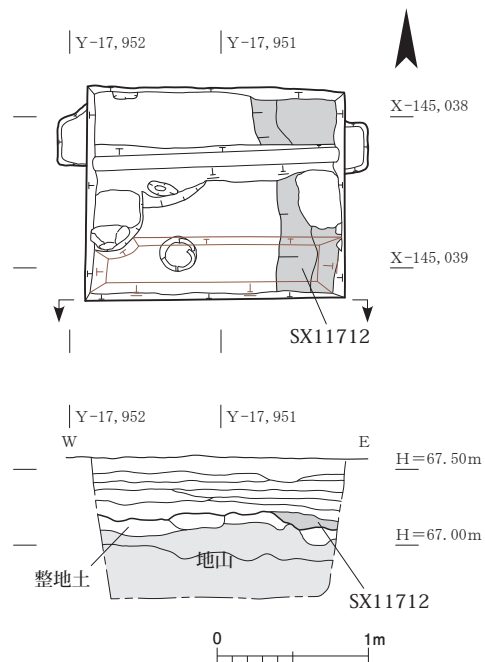


図 90 第 645 次調査北区 遺構図・南壁土層図 (東西反転) 1 : 50

土坑 SK11708 調査区中央部で検出した。東西 1.0 m 以上、南北 0.7 m 以上、深さ 55cm 以上。さらに西 (既設管の下) と南 (調査区外) に続く。土坑 SK11707 と重複し、それより古い。出土土器から、平安時代中頃の遺構とみられる。古代の瓦が多量に廃棄されており、周辺の瓦葺建物の修理や廃絶に関わる可能性がある。

土坑 SK11709 調査区西北隅で検出した。東西 0.5 m 以上、南北 0.3 m 以上、深さ 45cm 以上。

土坑 SK11711 調査区西南部で検出した。第 363 次で検出した落ち込みの北の続き。西肩は既設管を越えて北に延びず、管の下で北東に折れると推定される。第 363 次の所見とあわせると、東西 0.3m 以上、南北 1.2 m 以上、深さ 40cm 以上。さらに東 (既設管の下) に続く。時期不明。
(桑田訓也)

(5) 出土遺物

瓦磚類 本調査で出土した瓦磚類は表 16 に示したとおりで、主な瓦磚の出土量は、軒丸瓦 23 点、軒平瓦 15 点、丸瓦 86kg、軒平瓦 234kg、磚 2 kg である。以下、残りのよい軒瓦のみ記述する (図 92、PL.31-1)。

図 92-1 は 6282Ba で丸瓦部が残存、瓦当から約 15 cm のところに焼成後に穿孔した釘孔が 1 か所ある。2 は 6301I、外区外縁に線鋸歯文が残る。8 は 6285A で調整等は磨滅のため不明。3 は新型式の軒丸瓦である。中

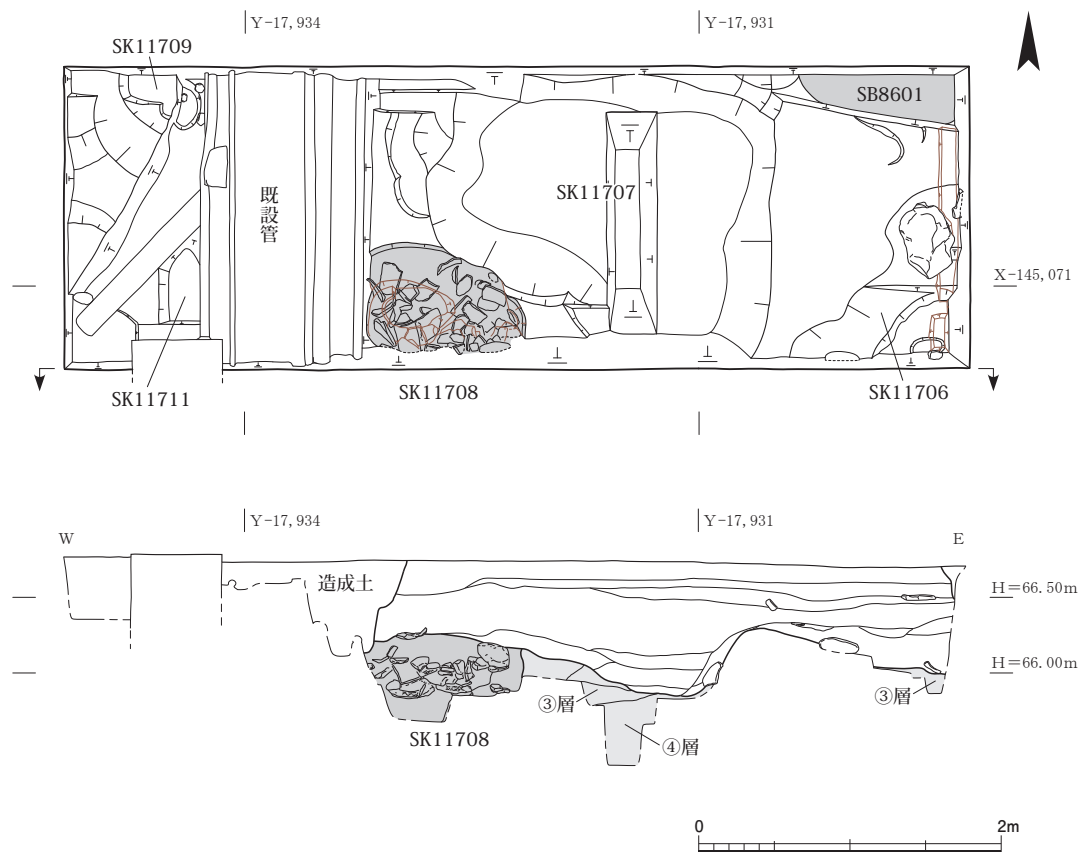


図 91 第 645 次調査南区 遺構図・南壁土層図（東西反転） 1 : 50

房は全体にやや突出し、蓮子は磨滅のため不明瞭だが 1 + 8 あるいは 9 の可能性がある。蓮弁は複弁 8 弁で独立間弁、外区の珠文は 20 であろう。外区外縁は低い直立縁で線鋸歯文がある。瓦当側縁には範端痕が残る。9 は 6671B、顎部は欠損している。以上は奈良時代の軒瓦である。4 の軒丸瓦は、中房蓮子が 1 + 4、中房周囲には圏線が巡る。蓮弁は単弁 16 弁、外区には 20 の珠文を飾る。外縁に鋸歯文はなく、瓦当側縁には範端痕がみられる。平安時代中期の瓦であろう。表 16 に示した 6721 型式も含めて、1 ~ 4、8・9 は SK11708 から出土した。7 は 6667A、段顎だが調整等は不明、SK11706 から出土した。5 は巴文軒平瓦、6 は「法」字文の薬師寺 96 型式。5・6 は鎌倉時代の軒瓦で SK11707 から出土した。（今井晃樹）

土器・土製品 本調査では、整理用コンテナ 4 箱分の土器・土製品が出土した。うち 2 箱分が遺構からの出土である。土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器といった古代から近現代までの資料を含む。遺構の年代に関わる土器を示す（図 93、PL.31-2）。1・2 は SK11708 出土、

表 16 第 645 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6282	Ba	1	6667	A	1	平瓦（刻印）	2
	H	1	6671	B	1	鬼瓦（中世）	1
6285	A	1	6721	?	1	（近世）	1
6301	I	1	古代		2	用途不明道具瓦	1
巴（中世）		1	平安		1	井戸枳磚	2
薬096		3	鎌倉		2		
新型式（奈良）		1	中世		4		
古代		2	近世		1		
平安		1	型式不明		1		
中世		8	時代不明		1		
近世		1					
時代不明		2					
軒丸瓦計		23	軒平瓦計		15	その他計	
		丸瓦			平瓦	磚	
重量		86.189kg			234.421kg	凝灰岩	
点数		566			2,394	4	
						13	

3 ~ 12 は SK11707 出土である。

1・2 は黒色土器の碗。いずれも貼り付け高台。1 は内黒の A 類で、森隆分類³⁾の畿内系Ⅲ類。2 は両黒の B 類で、畿内系Ⅳ類。1 は 10 世紀、2 は 10 世紀後半 ~ 11 世紀に位置づけられる。

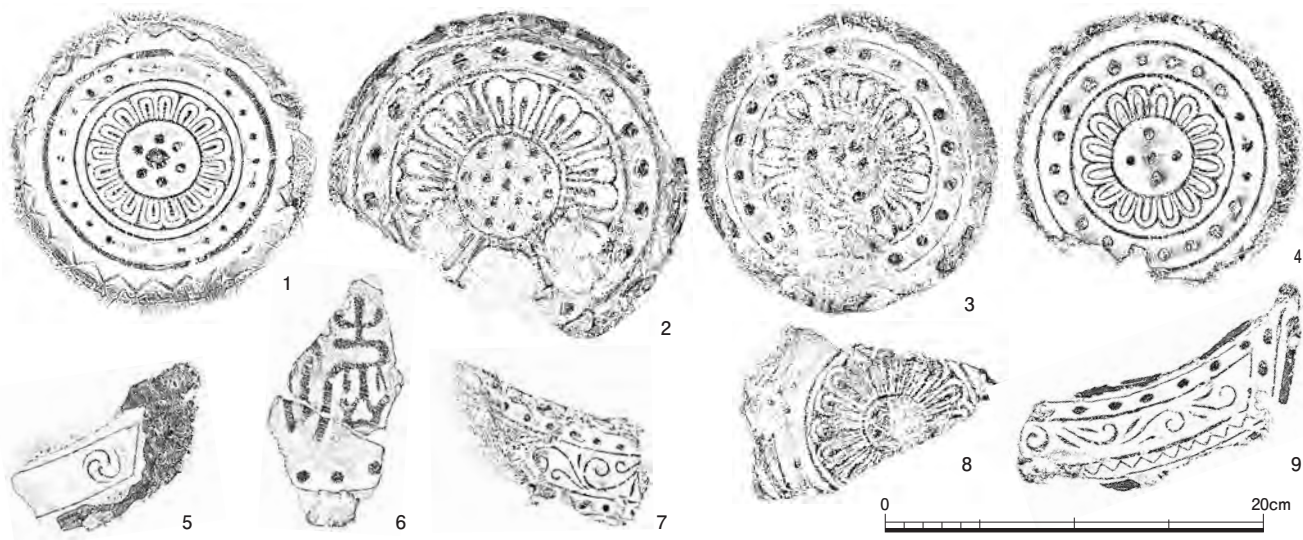


図 92 第 645 次調査出土軒瓦 1 : 4

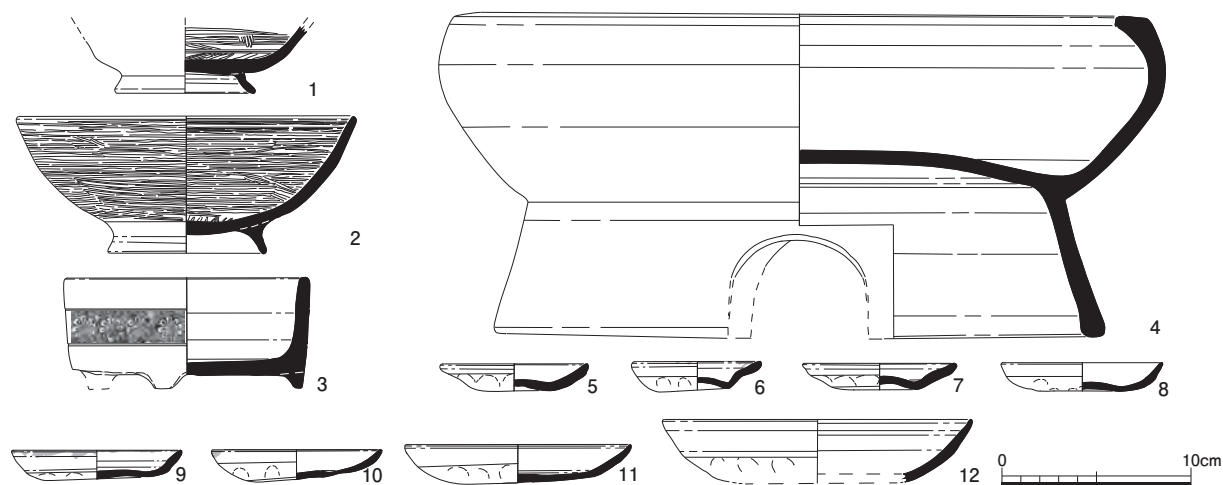


図 93 第 645 次調査出土土器 1 : 4

3・4は瓦質土器。3は佐藤重聖分類⁴⁾の小型浅鉢型土器Ⅰ類、4は浅鉢型土器Ⅵ-A類。3は15世紀中頃～16世第3四半期、4は16世紀第3四半期～17世紀初頭に位置づけられる。

5～12は土師器皿。形態・サイズにはヴァリエーションがあるが、口径8～9cmのものが最も多い。いずれも外面底部は指オサエ、口縁部と内面はナデ調整。5～7はいわゆる「へそ皿」。5・6・9・10は灯明皿で、12は全体に煤が付着する。いずれも16世紀第2四半期頃の奈良市HJ482次SX14出土品⁵⁾に様相が近い。

以上のようにSK11708からは11世紀、SK11707からは16世紀第3四半期～17世紀初頭を下限とする土器類

が出土し、遺構の年代の上限を示す。 (丹羽崇史)

有機質遺物 木端2点と木炭14.3gが出土したほか、SK11706からナツメやナシ亜科などの種実13点が出土した。

鉄器 角釘の茎が2点出土した。いずれも厚さ3～5mmの小型品で、残存長3cm程度。

石材 SK11707から粘板岩片、安山岩片と流紋岩片が各1点、包含層(灰赤土)から安山岩片が2点出土した。後者の安山岩には表面が赤変して発泡しているものがあり、被熱の可能性はある。なお、SK11707からは黒色の焼土と木炭も少量出土している。

(和田一之輔)

5 第 651 次調査

(1) 作業の経過

名勝法華寺庭園の西北部に所在する蔵の改修および周辺部の造成にともなう事前の確認調査である。

10月11日に調査区の設定、レベル移動をおこない、10月12日に人力による掘削を開始した。10月14日には調査区全景写真の撮影をおこなった。10月18日に遺構図および土層図を作成し、埋め戻しに着手した。10月19日に埋め戻しを完了し、現場の撤収をおこない、発掘作業を終了した。出土遺物の洗浄・整理事業は発掘作業と並行しておこなった。なお、10月14日には「名勝法華寺庭園保存整備委員会」の現地視察と調査指導を受けた。

(2) 調査の方法

現在の法華寺西辺の築地塀と蔵の間の西から東に下る傾斜地に、東側を通るU字溝を一部よける形で東西5.5m、南北3.0mの調査区を設定した。調査地は法華寺境内西北隅、名勝法華寺庭園の西北の最奥にあたるため重機等の搬入が不可能であり、すべて人力により掘削をおこなう必要があった。そのため、まず南側の幅2m分のみ掘削をおこない、調査状況を踏まえて当初設定した調査範囲まで拡張する方針とした。しかし後述のとおり調査の結果、調査地付近は近現代の盛土により厚く造成されていることが判明したため拡張はおこなわなかった。そのため、最終的な調査面積は東西5.5m、南北2.0mの10.4㎡となった。

発掘作業は、人力により表土を除去したのち、調査区の南辺および東辺のみ幅約70cmのサブトレンチを設定して掘り下げをおこなった。サブトレンチ内の西部では近世以前の整地土の可能性がある黄褐色砂質土の上面まで掘削をおこなった。サブトレンチ内の東部では湧水のため掘削が困難となったため、黄褐色砂質土の上に堆積する褐斑灰色シルト層中までの掘削とした。本調査の目的は調査地周辺の造成計画にともなう地下遺構への影響の有無の確認であったが、上記掘削により遺構面への影響がないことが確認できたため、調査を終了した。

調査終了時には遺構面保護と掘削停止面の明示を目的に砂を散布した上で埋め戻しをおこなった。

調査ではGNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平

面図を作成した。標高は平城No.54 (X=-145,389.024、Y=-18,064.600、H=61.364 m) からオートレベルで直接水準移動をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

(3) 基本層序

現地表から①表土(厚さ10～55cm)、②近現代の造成土(30～45cm)、③近現代の旧表土(10～20cm)、④灰褐色シルト(5～30cm)、⑤褐斑灰色シルト、⑥黄褐色砂質土である(図94)。

④の灰褐色シルトは奈良時代～近世の遺物を含む遺物包含層である。⑤の褐斑灰色シルトは奈良時代～近世の遺物を含み、検出した上面が比較的平坦であるため遺物包含層または近世の整地土の可能性がある。⑥の黄褐色砂質土は掘削をおこなっておらず性格の詳細は不明だが、土質が均質で非常に締まりが良いため近世以前の整地土の可能性が高い。

⑤の褐斑灰色シルトは調査区東半で現地表下約1.3m、標高約68.0mからみられ、最も深い調査区東端で標高約67.6mまで確認した。⑥の黄褐色砂質土は調査区西半で現地表下1.0～1.2m、標高68.0～68.2mで確認した。

(4) 検出遺構

明確な遺構は確認できなかったが、土層観察等により現地地形の形成および旧地形に関する所見を得た(図94、PL.32-1)。

調査区のすぐ西側には現在の法華寺境内の西辺となる築地塀が南北に通っており、調査区周辺はその築地塀に向かって東から西に向かって80cmほど高くなっている。調査では現地表下約60～90cmの標高68.4m付近で旧表土を、その下で近世の遺物を含む遺物包含層である灰褐色シルトを確認したが、灰褐色シルト上面の標高は調査区東端で約68.20m、西端で約68.45mであり、その傾斜は現地表面に比べ緩やかである。すなわち、現在みられる西側に向かって高くなる地形は近現代の造成およびその後の表土の堆積によって形成されたことがわかる。

近世以前の遺構面については一部で可能性のある層を検出したが詳細は不明である。ただし、本調査成果を踏まえば周囲は本来は西および北に向かって緩やかに標高が高くなる地形であった可能性が想定できる。

(5) 出土遺物

瓦 類 (PL.32-2) 表土および近現代の造成土を中心に大量の瓦類が出土したが、発掘作業と並行して現地で

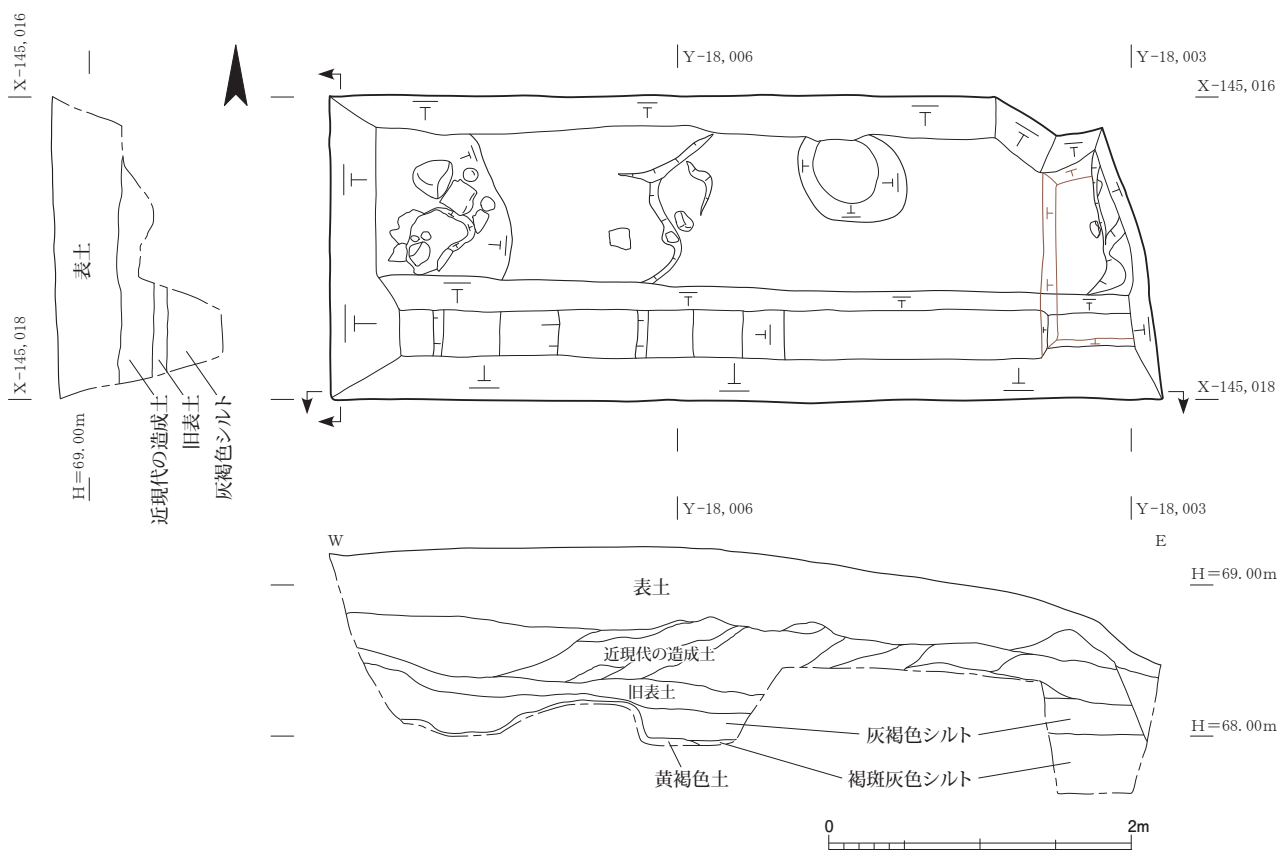


図 94 第 651 次調査区遺構図・西壁・南壁土層図（南壁は東西反転） 1 : 50

選別をおこない、古代・中世に属するとみられるものと近世以降でも特徴的なもののみ持ち帰り、整理作業の対象とした。整理作業の対象とした瓦磚類は丸瓦 121 点（約 30.9kg）、平瓦 480 点（約 76.6kg）で、その概要は表 17 のとおりである。なお、整理作業の対象外とした瓦は調査区の埋め戻しに合わせて埋め戻した。

軒丸瓦は 5 点出土した。古代の型式不明のもの 1 点、中世の巴瓦 2 点（図 95-1・2）、近世以降の巴瓦 2 点がある。軒平瓦は 4 点出土した。3 は鎌倉時代の素文縁唐草文軒平瓦で『薬師寺報告』における薬師寺 321 型式と同范である。平瓦広端部凸面側を斜めに削りそこに瓦当の粘土を貼り付け、そのうえでさらに外縁の下辺のみ別の粘土を加えて成形している。凸面には凹型台の圧痕がみられる。これまで薬師寺のほか海龍王寺からも出土しており、建長 5 年（1253）頃の法華寺金堂の再建時に用いられたものとされる（『紀要 2020』）。軒平瓦はほかに近世のものが 3 点出土した。

鬼瓦は中世のものが 2 点出土した。外縁付近のみの遺存であり詳細は不明である。

そのほか螭羽瓦や目板瓦といった道具瓦が出土しているが、いずれも近世以降のものである。

なお、これらの軒瓦、鬼瓦等はいずれも表土および近

表 17 第 651 次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		軒棧瓦	
型式	点数	型式	点数		点数
古代	1	薬師寺321	1	近世	2
巴（中世）	2	近世	3		
（近世）	1			軒棧瓦計	2
（近世～近代）	1			その他	
				螭羽瓦（近世）	1
				鬼瓦（中世）	2
				目板瓦	1
				用途不明道具瓦	1
軒丸瓦計	5	軒平瓦計	4	その他計	5
		丸瓦		平瓦	
重量		30.853kg		76.635kg	
点数		121		480	

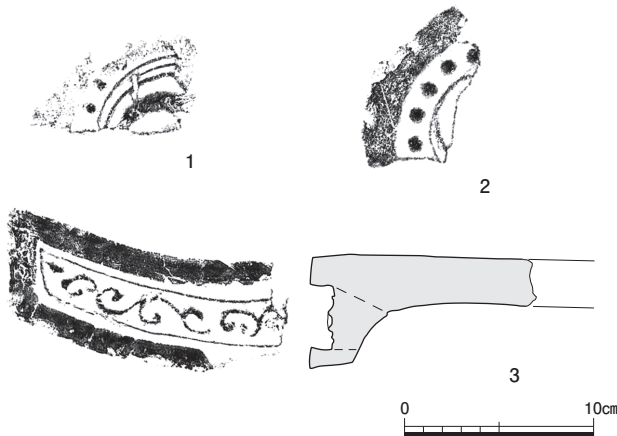


図 95 第 651 次調査出土軒瓦 1 : 4

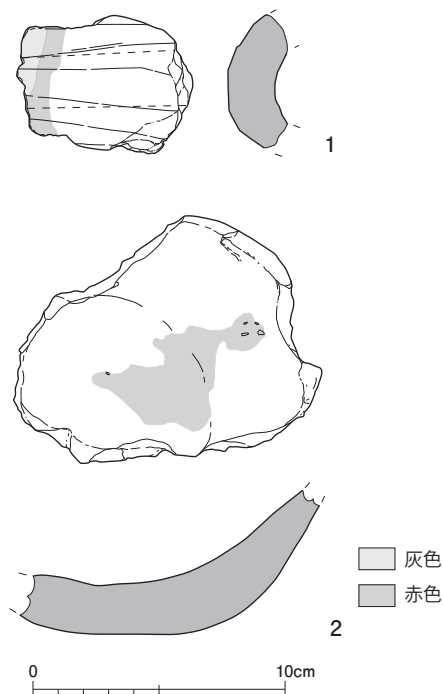


図 96 第 651 次調査出土冶金関連遺物 1 : 3

現代の造成土からの出土である。(川畑 純)

土器・土製品 本調査区からは整理用コンテナ 1 箱分の土器が出土した。いずれも小片で、古代の須恵器・土師器を少量含むが近世の瓦質土器や陶磁器が主体である。近現代の造成土からは染付碗や瓦質土器の鉢片が出土し、灰褐色シルト層からは S 字状の口縁部を呈する瓦質土器のすり鉢や灯明皿として転用した土師器小皿が出土した。いずれも近世以降に位置づけられる。(小田裕樹)

冶金関連遺物 埴塼片 1 点、轆羽口片 1 点が出土した。轆羽口片(図 96-1、PL32-3-1)は胴部の表面に長軸方向の成形痕が明瞭に残る。地の色調は橙褐色で、先端側は灰色～薄灰色に変色する。残存長 7.0cm、残存幅 5.5cm。近現代の造成土出土。埴塼片(図 96-2、PL32-3-2)は底部付近のみが残存し、口縁にむけて緩やかに立ち上がる。内面、外面ともに色調は明橙褐色で、内面の一部が赤褐色に被熱変色する。残存器高 5.8cm。残存深さ 3.7cm。底部の厚さ 2.0～2.3cm。残存部から復元した最大径は約 16cm。表土出土。

金属製品 鉄角釘(PL32-3-3)が 1 点出土した。残存長 7.3cm。灰褐色シルト出土。このほかに表土、近現代の造成土から不明金属片が数点出土した。出土層位から判断すると、いずれも近世以降の遺物とみられる。(浦 蓉子)

6 まとめ

今回の調査では、狭小ながら名勝法華寺庭園および史跡法華寺旧境内の比較的広い範囲での発掘調査をおこなった。その成果は次のとおりである。

第 644 次調査では 21 ヲ所で発掘調査をおこなったが、ほとんどの調査区で掘削は石組護岸の裏込土内におさまった。地山を確認した 3 ヲ所(8・11・17 区)についても、古代の遺構は確認できなかった。ただし、17 区で検出した凝灰岩は、古代の遺構に由来する可能性があるものとして注目される。

第 645 次調査では『大和名所図会』に見える近世の寺観の復元や、不明な点が多い平安時代の境内の様相解明に寄与しうる情報を得ることができた。

第 651 次調査では明確な遺構は確認できなかった。一方で、土層の観察等により現状の地形の形成および旧地形の様相を明らかにすることができ、法華寺旧境内の地形の変遷の復元に資するデータをすることができた。

(大澤・桑田・川畑)

註

- 1) 浅野清「大和法華寺に於ける新発見について」『大和文化研究』創刊号、1953。奈良県教育委員会文化財保存課『重要文化財法華寺本堂南門鐘樓修理工事報告書』1956。なお、本堂前面の建物(SB8600)は、平城第 363 次調査の成果によると、梁行も 10 尺等間とされる(『紀要 2004』)。
- 2) 『大和古寺大観』第 5 巻、岩波書店、1978、解説、54 頁図 40 参照。以下、法華寺の型式番号は上記本による。
- 3) 森隆「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、1995 年。
- 4) 佐藤亜聖「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI、1996。
- 5) 奈良市埋蔵文化財調査センター『南都出土中近世土器資料集－奈良町高天町遺跡(HJ 第 559 次調査)出土資料－』奈良市教育委員会、2014。